國學院大學学術情報リポジトリ

# 國學院大學歴史学授業変遷考

| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター<br>公開日: 2025-03-18<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 齊藤, みのり<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/0002001487 |

# 國學院大學歴史学授業変遷考

齊藤　みのり

## はじめに

國學院大學における歴史学の授業は、開校以来の長き系譜を持っており、当世一流の研究者が何人もこの教壇に立ってきた。著者は、これまで戦前の国史学会や、國學院大學で長年教鞭を執った岩橋小弥太に関する分析を行い[1]、教師の指導実態や、学生がどのように学んできたかの解明を試みてきた。しかしながら、これらの分析をする上で、どのような教師がいつ教壇に立ち、如何なる授業が開講されていたのかという情報が欠けており、戦前の国史学科における教授・講師陣も概観する必要が生じてきた。

戦前の本学国史学科の教師陣は、東京帝国大学から出向いている者が多いことは周知の事実として扱われているが、具体的にどのような人材がいたのかを概観した研究は存在しない。また、どのような講座が開講されていたかという点は、『國學院大學百年史』などにも掲載されているが、契機となった年などをピックアップする形であるため、継続的な動きを見ることができないという問題点があった[2]。

そこで本稿では、戦前の国史学科及び歴史学に関連する授業について、その授業内容と担当教師について、視覚的に捉えられるよう情報を整理し、当時の歴史学教育について概観することを目的とする。ただし、史料的制約もあるため、分析の時期を開校初期、大学令以後、戦後の三期に分け、特に、『國學院雑誌』『国史学』などから開講講座や教師陣を追っていく。なお、『國學院雑誌』や『国史学』、『國學院大学百年史』掲載の開講一覧は授業名のみ記されており、詳細がわからない授業も多いためあくまで指針程度に留まるが、どんな講座が開講されていたか、その変遷を確認できる。また、大学令以後との比較対象として、開校初期と戦後についても検討するが、開校初期については、連続した講座・教師情報を追うことが難しいため、開校初年度と大学部設置時の二つの時期に分析の焦点を当て、戦後については現在に続く大学組織の基礎が整えられた昭和二十年代頃に触れる。なお、予科などは分析対象外とするため、ここでは取り上げない。

## 一　初期の國學院

### 一―一　開校初年の國學院の授業

國學院の誕生は明治二十三年（一八九〇）年である。この開校初年の授業の様子であるが、祝詞研究者であり各地神社の宮司を歴任した稲村真里が回顧録にて触れているのでここで取り上げたい。國學院一期生である稲村は当時の國學院について、「当時は国史国文の勃興の機運が横溢といふやうな有様であり、落合直文、小中村義象、萩野由之、三先生の文名は嘖々として四方を風靡する有様であり、文学全書や歌学全書などの刊行もあり、旭日昇天といふやうな時であつた[3]」と述懐している。また、授業についても次のように紹介している。

〈史料一〉稲村真里「國學院の最初の頃」[4]

入学の当初は、勿論設立の趣旨によつて教養せられたのであるが、やはり世の風潮を参酌して文学趣味が多かつたのではないかと思はれる。それでいよ〳〵授業が始まつた。ざつと学課の様子を一瞥すると、道義、国史、国文といふものを主において組立てられてあつた。先づ講究所國學院の職員の顔触は（以下敬称省略失礼御免被下度）

副総裁　久我建通侯　　院　長　高崎正風男
所　長　山田顕義伯　　参　次　色川　圀士
幹事長　松野　勇雄　　主　事　青戸　波江
幹　事　久保　悳隣

学科は

道義―　日本倫理　松野　勇雄

国史―

古事記　本居　豊穎　　日本紀　井上　頼圀
中古史　今泉　定助　　徳川史、水戸の修史　内藤　耻叟
歴史地理　三上参次

国文―

源氏物語　　本居　豊穎　　作文（普通文）　佐藤　寛
枕草子　　黒川　真頼　　作文（中古文）　坂（ママ）　正臣
万葉集　　木村　正辞　　文学史　　高津鍬三郎

徒然草、古今集　畠山　健　美辞学　三上　参次
大鏡　久米　幹文　徳川時代文学史　関根　正直
文法、作文　落合　直文　言語学（古文修辞法）　物集　高見

法制—
令義解　小中村清矩　日本制度通　小中村義象
職原抄、法曹至要抄　井上頼圀

外国史—
西洋史（上世、近世）　三上　参次
哲学—哲学史、倫理学史　岡田良平　倫理学　渡部董之介
教育学　篠田　利英

漢文—
左　伝　川田　剛　詩経　三島　毅
老　子　島田　重礼

英文—シエークスピーヤ　坪内雄蔵　詩及文集　池田菊苗
其の他—漢土の修史、内藤耻叟　歴史研究法　磯田良
音韻学　木村正辞

といふやうな有様で、当時の碩学大家を網羅しての授業であるから、われ〳〵は暗黒の世界から出て、忽然百花繚乱たる花園に逍遙するやうな、実に此の上もない愉快と幸福とを感じた次第である

初年度の学科ごとの授業とその担当者が記されており、国史学科は古事記を本居豊穎、日本紀を井上頼圀、中古史を今泉定助、徳川史・水戸の修史を内藤耻叟、歴史地理を三上参次が担当する他、法制史にて令義解を小中村清矩、日本制度通を小中村義象、職原抄・法曹至要抄を井上頼圀が担当している。また、外国史で西洋史（上世、近世）を三上参次、その他として漢土の修史を内藤耻叟、歴史研究法を磯田良が講義し、学科を跨いで教師が様々な授業を担当していることがわかる。

この時期の授業について、当時の学生の回顧録などからその様子が窺える。次の史料は、『延喜式』などの校訂に従事した田邊勝哉（明治二十四年入学）によるものであり、井上頼圀の授業の様子が窺える。

〈史料一〉田邊勝哉「井上頼圀先生の思ひ出」[5]

私が國學院に入学以来、先生の担当せられた学科は一学年に出雲風土記と古事記、二学年に法曹至要抄、三学年に類聚三代格であった。（中略）机上に参考書を並べて博引旁証、その学殖の深きを思はしめた。然し講義は至りて陽気にと、時々諧謔を交へ、学生と共に興に乗じて笑はれ私等洋々たるものであつた。出雲風土記の講義にても、その物産の項などにては、先生が古医道本草学に造詣深きに依り、本草図譜を示してそれを一々よく説明せられ、また法曹至要抄、類聚三代格の如き所謂法律書などの堅苦しきものも、その意義を懇切に説明して学生がよく会得するやうに教へられた。

法制史や古事記・風土記等を担当した井上頼圀について、井上の深い学識を活かした授業の様子が右の史料からは垣間見える。また、本学で教鞭を執った国文学者高橋龍雄も、在学当時の教師陣の授業について次のように回顧している。

〈史料三〉高橋龍雄「思ひ出三章　佐々木老候御父子――内藤耻叟先生と湯本武比古先生――諸先生の講釋振り」[6]

諸先生の講釈振り

諸先生の講釈（講義とはいはなかつた）振りは一つの型があつたやうに思ふ。それは幕府時代に、大名の前における諸儒の講釈の仕振であつたと想像する。一言半句無駄がなく、厳粛に流麗に諄々として説き来り説き去るのだ。中にも黒川真頼先生の枕草子の講釈は、有名なもので、萩野由之先生などは私共の教場内に傍聴なされたことが屢々あつた。上品で悠揚迫らざる講釈は、川田剛先生の論語、本居豊穎先生の古事記で、今もなほその御姿と御声とが、眼前に髣髴たる感がある。

（中略）

一番むつかしく困つたのは、物集高見先生の眼をつぶつての御講義、「よくおはまりなさい」と仰せられるが、一向に「はまられない」ので困つた。最も滑稽洒落に富んでゐたのは井上頼圀先生の法曹至要抄で、生徒はをかしくないのに、先生ひとりで哄笑なされてゐた。

（中略）

私は老書生で上京したから、帝大専科に入らうと思つたが、國學院の先生と帝大の先生とを比べてみると、全く御話にならぬ。國學院は、日本一の国学者を集めて居り、帝大は頗る貧弱であつたから、意を決して國學院に入学したことである。

当時講義は講釈と言い、江戸時代の大名への諸儒の講釈を想像したと語る。また当時の國學院における教師陣の質の高さは、入学を考える学生の重要な志望動機であったことが窺える。

## 一―二　明治四十年大学部開講以後の授業

國學院設立から凡そ二十年後、大学部が開講し、初めて「國學院大學」の名称が使用された明治四十年には、新たな科目が設けられた。歴史学に関わると思われる科目名を確認すると、倫理史（紀平正美）、国史／史籍学（藤岡継平）、国史〈上古史〉（松本愛重）、法制史（沢辺復正）、古事記／風土記（大宮表馬）、日記類（尾上八郎）、東洋史（松井等）、西洋史（矢野太郎）が記されている。[7] 翌年には本科二年が開講し、鎌倉時代史（岡部精一）、戦国時代史（藤岡継平）、法制史（沢辺復正）、有職故実（小杉榲邨）、古文書学（伊木寿一）、禁秘抄（黒川真道）、東洋史（松井等）、朝鮮史（今西龍）、西洋史（磯田良）の科目が開講された。[8]

『國學院雑誌』において、明治四十四年度の開講科目及び教師陣の具体的な担当時代などを掲載しているので、ここに【表①】として抜粋し、紹介したい。

【表①】本学年各学科担当講師[9]

| 国史・法制場所 | | | |
|---|---|---|---|
| 奈良朝及平安朝史 | 和田　英松 | 徳川時代史 | 植木直一郎 |
| 上古史 | 文学士　芝　葛盛 | 有職故実 | 黒川　真道 |
| 鎌倉室町時代史 | 文学士　岡部　精一 | 講読（禁秘抄） | 黒川　真道 |
| 徳川時代史 | 文学士　幸田　成友 | 古文書 | 文学士　伊木　寿一 |
| 徳川時代史 | 沢田　章 | 記録 | 山本　信哉 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 国史読本講読 | 文学士　沢辺　復正 | 講読（台記・玉葉） | 文学博士　井上　頼囶 | |
| 織田豊臣時代史 | 文学士　渡辺　世祐 | 講読（古事記・風土記） | 丸山　正彦 | |
| 歴史研究法 | 文学士　小林　秀雄 | 法学通論 | 法学士　西川　一男 | |
| 法制史 | 植木直一郎 | 経済汎論 | 中島　信虎 | |
| 外国史学 | | | | |
| 西洋史 | 文学士　磯田　良 | 東洋史 | 文学士　松井　等 | |
| 西洋史 | 文学士　森田鉄三郎 | 東洋史 | 猪狩　又蔵 | |
| 西洋史 | 文学士　小林　秀雄 | | | |

徳川時代だけで担当者が三人というのは、教師の総数を考えると特徴的である。また、講読系の授業が豊富であることに加え、古文書と記録もそれぞれ教える授業があった。国史・法制・外国史だけではなく、後の時代に『国史学』掲載科目に盛り込まれる授業も他学科に散見される。例えば、倫理・哲学では、西洋倫理学史・哲学史などを紀平正美が、東洋倫理学史を有馬祐政が、美学及美術史を乙骨三郎が担当している。[10] また、地理分野も設けられ、地理学・国史地理を原秀四郎、地誌・地文を寺崎留吉、地質学を横山又次郎、人種学を坪井正五郎が担当していた。[11]

この時期既に多くの分野の講座及び教師を揃え、学生の学びを後押しする体制が整えられていたと言える。特に講読や古文書学系の授業が登場していることは、その後の國學院大學の歴史学教育の方向性を決定づけたと言えるだろう。いくつか教師や講座の入れ替わりはあったが、おおよそ明治後期―大正前期の授業はこのような人員と講座内容であった。この後、大正中期頃の講座は『國學院雑誌』に掲載が無いため、詳細を追うことができない。

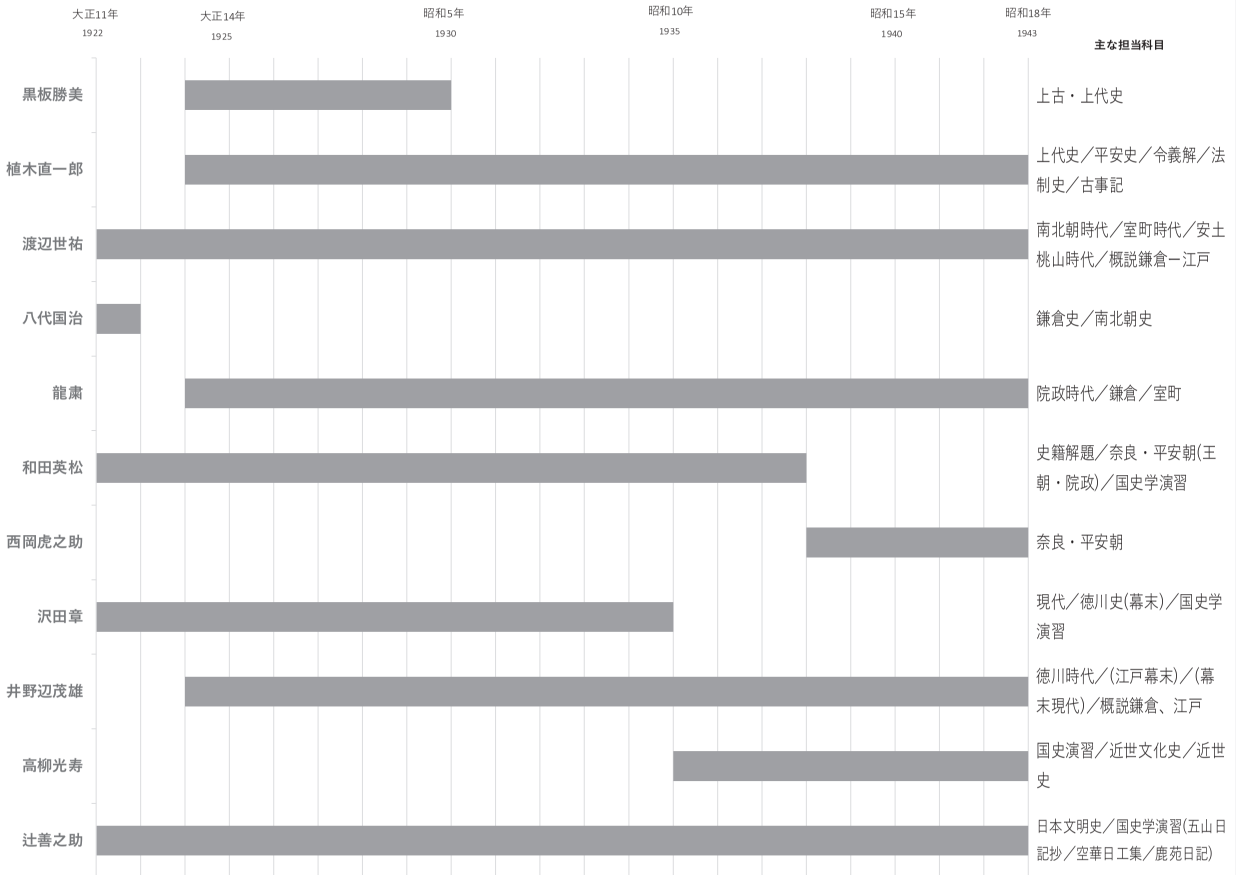
## 二　大学令公布後の教師陣容

先述の時代を経て、大正九年（一九二〇）の大学令公布後はその陣容がさらに充実していくことになる。大学令公布に伴い学則・諸規程の改正が行われ、それによる開講講義及び演習も整えられた。参考までに紹介すると、甲種（毎学年開設スルモノ）は、「帝国憲法及ビ皇室典範、国民道徳、神道、礼典、倫理学、教育学、社会学、東洋倫理学史、西洋倫理学史、西洋哲学史、宗教学、日本宗教史、国史、法制史、東洋史、西洋史、史学研究法、古文書学、文学概論、国文学史、国語学、言語学、道義ニ関スル演習、国史ニ関スル演習、国文学ニ関スル演習、漢文学ニ関スル演習、西洋文学ニ関スル演習」が記される。乙種（二学年間ニ一回開設スルモノ）は、「国家学、行政学、民法、刑法、経済学、論理及ビ認識論、国学史、日本美術史、日本音楽史、歴史地理、有職故実、漢文学史、漢文法、仏教概説」が開講予定であった。丙種（三学年間ニ一回開設スルモノ）は、「憲法論、考古学、人類学、比較神話学、比較言語学、日本風俗史、美術史、音楽通論、図書館学、新聞学」であった。これらの授業の他、「以上ノ外、科外講義ヲ開設スルコトアルベシ」として、臨時に講義が設けられることもあった。[12] なお、日本音楽史や美術史など、当初毎年開講ではなかった講座も、後にはほぼ毎年開講されている。

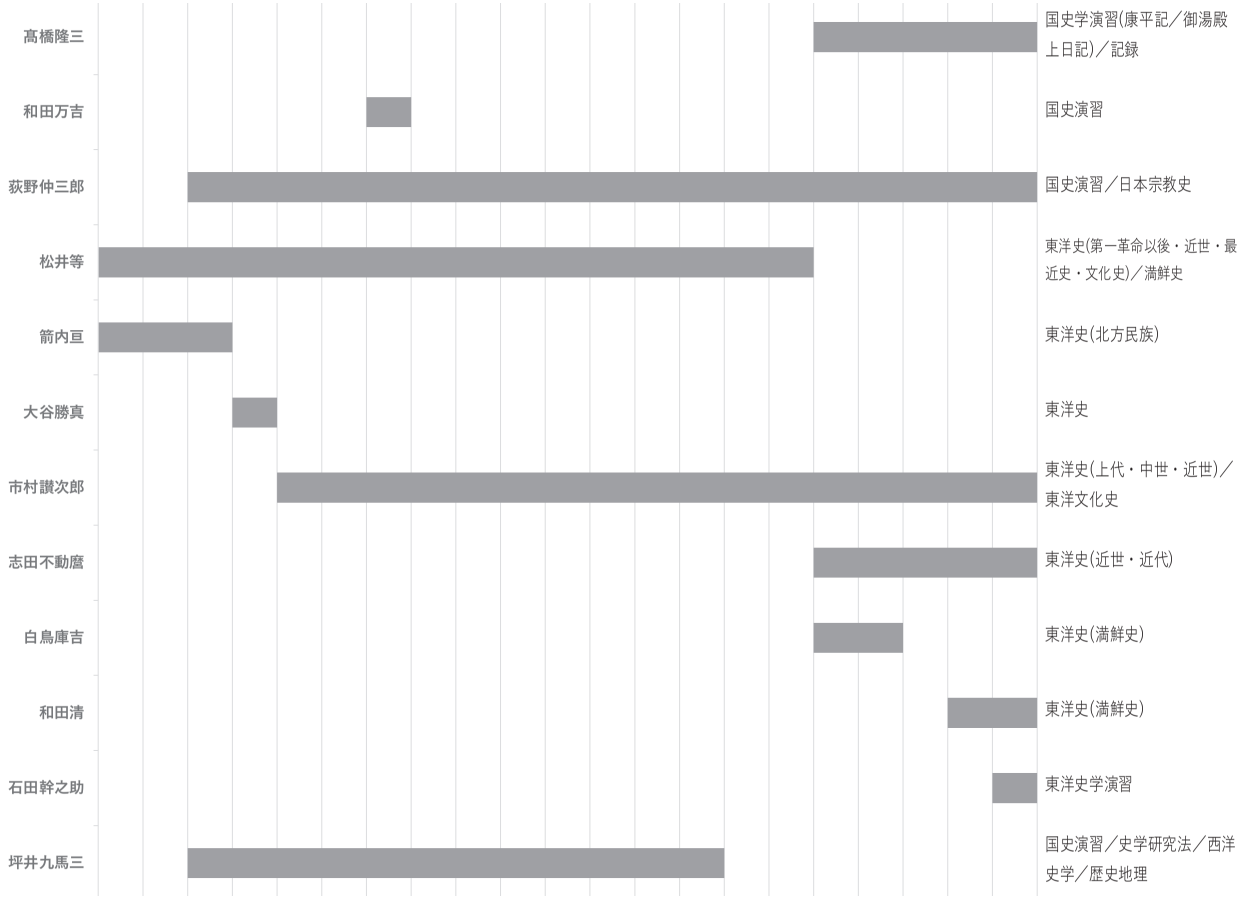
では、これらの授業を担当した教師陣の陣容と授業の具体的な内容は如何なるものであったのだろうか。【表②】は、『國學院雑誌』『国史学』より、大学令以後、戦中の昭和十七年度まで本学で授業を担当した主な教師陣と担当講座を一覧化したものである。史料の制約上、大正十一年が時代の上限となっているが、当時の授業の変遷を可視化することを試みた。なお、予科の授業は除外している。

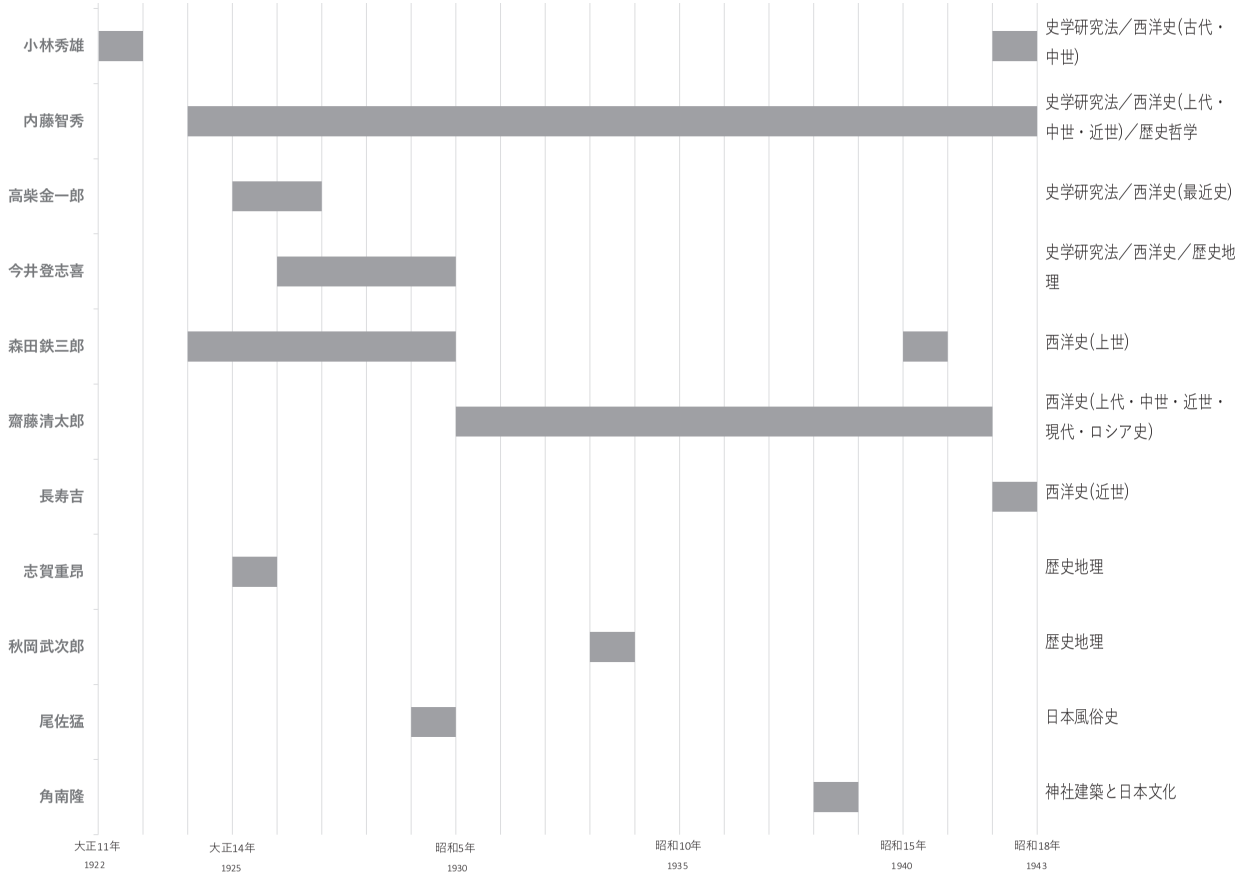
【表②】に記される戦前の國學院大學史学担当教師は、東京帝国大学出身者や、史料編纂掛（史料編纂所）に携わる

## 【表②】國學院大學歴史学主要教師・担当科目年表



伊木寿一
古文書学
岩橋小弥太
古文書学／国史演習
松本愛重
日本書紀／古事記／奈良朝／平安朝／有職故実／日本文明史／国史学演習(平安朝記録)
関根正直
有職故実
河鰭実英
有職故実
鳥居龍蔵
人類学／考古学／国史演習
大場磐雄
日本考古学
藤懸静也
日本美術史(神道美術史・近世)
田辺尚雄
日本音楽史／音楽通論／音楽通論(最近西洋音楽史)
河野省三
古事記／日本書紀／国史／国学史／神道概論
山本信哉
国史演習／古事記／日本書紀／神道史
武田祐吉
古事記／日本書紀


高橋隆三
国史学演習(康平記／御湯殿上日記)／記録
和田万吉
国史演習
荻野仲三郎
国史演習／日本宗教史
松井等
東洋史(第一革命以後・近世・最近史・文化史)／満鮮史
箭内亘
東洋史(北方民族)
大谷勝真
東洋史
市村讃次郎
東洋史(上代・中世・近世)／東洋文化史
志田不動麿
東洋史(近世・近代)
白鳥庫吉
東洋史(満鮮史)
和田清
東洋史(満鮮史)
石田幹之助
東洋史学演習
坪井九馬三
国史演習／史学研究法／西洋史学／歴史地理




『國學院雑誌』『国史学』彙報欄掲載の開講講座一覧、『國學院大學百年史』記載記述より作成。大正 11 年度より昭和 17 年度まで。大正 12・昭和 2 年度の記録なし。隔年など断続的に受け持っている場合も、開始年と最終年で採用した。

人物が多い。伊木寿一、黒板勝美、芝葛盛、辻善之助、和田英松、松井等、龍粛、渡辺世祐らは東大出身かつ史料編纂官である。八代国治、井野辺茂雄、高橋隆三、高柳光寿、山本信哉、岩橋小弥太らは本学出身で史料編纂官であった。それ以外にも、史料編纂関係の仕事を経験している者が確認でき、文部省維新史料編纂官の岡部精一、古事類苑編纂を担当した黒川真道と関根正直、大阪市史編纂に従事した幸田成友などが挙げられる。日本史かつ文献史学の科目を担当した教師陣の大半は、このどちらかに該当しており、経験を積んだ教師陣による実践的、高度な指導を受けられる場として本学が整備されていたと指摘できる。

そのような教師による授業の内容だが、各時代史の他、演習では主に史料読みを行っていたようだ。辻善之助は、中世仏教史に関わる史料として五山日記抄・空華日工集・鹿苑日記などを教材とし、松本愛重は古代（平安期頃迄）の記録を、高橋隆三は康平記（平安中期）・御湯殿上日記（いつの部分か不明）など貴族社会の日記、植木直一郎は令義解を扱っている。このような史料を用いた演習自体は、明治末から大正前期頃は山本信哉が担当しており、「記録」「記録解題」「日記類」などと記されている。[13] また、明治期に黒川真道によって東鑑や禁秘抄の講読授業があり、[14] これらの授業の流れを受けていたと考えられる。一方、演習とは別に古文書学の授業も開講されていた。明治末期には、井上頼圀も古文書学として台記や玉葉を講じ、[15] この台記と玉葉は大正期に山本信哉に引き継がれたが、[16] その後無くなっている。【表②】では伊木寿一（明治期後半より担当）、[17] その後岩橋小弥太に引き継がれている。具体的な授業内容は不明だが、史料を読むことに関して豊富な授業機会が設けられていたと見て取れる。

他方、外国史学は、東洋史学、西洋史学に分かれている。授業自体は明治四十年代からあり、西洋史は矢野太郎、[18] 小林秀雄（大正期に離職の後、昭和十七年本学に復帰）、[19] 森田鉄三郎[20] の名が確認できる。この時期は小林が古代―中世を、森田が上世史を担当していた。東洋史は松井等が明治期より講義しているが、明治―大正前期頃は猪狩又蔵、[21]

今西龍[22]、林泰輔[23]などの名も見える。【表②】の時期には、西洋史は齋藤清太郎、坪井九馬三、内藤智秀らが主に担当している。特に「史学研究法」を西洋史の教師陣が担当しているのが特徴である。これは我が国の実証史学に大いに影響を与え、『史学研究法』を著した坪井九馬三の影響と言えよう。また、西洋史に関連することとして、戦前から坪井や今井ら西洋史を担当している教師が、歴史地理の授業も担当する場合があったことも挙げられる。確認できる限り、この時期の開講は限定的であるが[24]、後には西洋史の教師の手から離れることになる。一方、大学令以後の東洋史は松井等、市村瓚次郎が主な担当で、白鳥庫吉や志田不動麿の名も確認できる。昭和十年代末には石田幹之助ら戦後教鞭を執る教師が登場し、上代から近世史の他、文化史、満鮮史が開講していた。

以上が国史学科における主要な専攻の様子であったが、それ以外の授業も充実している。例として、考古学は鳥居龍蔵と後に大場磐雄が担当し、本学の考古学濫觴期を支えていた。考古学自体は、大正前期に髙橋健自が担当していたため[25]、本学での歴史は古いが、持続的な学生への教諭体制が整えられたのはこの時期と言える。

また、古くから美術史と音楽史の授業が設けられていたのも特徴である。美術史は藤懸静也、音楽史は田辺尚雄が長年担当し日本の音楽史や美術史を主に教えている。両名の授業自体は【表②】の通り大正後期頃からの開始だが、美術史は藤懸の前に乙骨三郎が明治後期頃より担当しており[26]、かなり古い系譜を持っている。さらに、文化史・風俗史系授業も確認できる。例えば、昭和四年度に尾佐猛の「日本風俗史」が開講されており、この一年のみの掲載なので単発の授業だったようだが、実は大正十三年時点で「日本風俗史」の授業自体は計画されていた（講師は未定[27]）。この他、昭和十三年には角南隆による「神社建築と日本文化」も開講するなど、幅広い講義が設けられている。

ところで、国史学会発行の『国史学』掲載科目には、年によって掲載の有無があるが、宗教史、経済史、哲学史、倫理学史なども散見される。数の多さや掲載年にばらつきがあるため、【表②】に反映してはいないが、国史学科生

にとって取るべき授業の一つとして扱われていたことがわかる。特に神道関係授業として神祇史、神道概論などが記されているのは[28]、國學院大學としての基本要件の反映であるが、一方で、神道学者である河野省三や宮地直一、山本信哉らも国史の授業を受け持つことがあった[29]。また、『国史学』に掲載されている授業として、古事記・日本書紀があるのも注目点である。有職故実や国史学演習などを受け持った松本愛重の他、武田祐吉など他学科の教師が受け持っている。古代史系の授業に含まれているという扱いなのだろうが、これらの例からは、国史と国文・神道の境界が曖昧であるような印象を受ける。また、〈史料一〉の稲村真里の科目一覧でも古事記・日本紀は国史学科扱いであるため、その流れを受け継いでいるのだろう。

以上のように、大学令公布後の國學院大學における日本史学は、史料編纂に携わる教師陣による様々な分野の講義・演習を通じ、学生は深い歴史的教養を身につけられた。外国史も、日本史に比べると規模は小さいが、当時の有名な学者陣が講義を担当しており、これらの積み重ねが下地となり、戦後の外国史に繋がることが指摘できる。幅広い分野の歴史を学べる環境にあり、通史や演習だけではなく、古文書学や記録の授業や、音楽史や美術史、哲学史、風俗史といった分野も取り揃え、歴史学を学ぶ上で恵まれた環境にあったことが確認できた。

先述の通り、当初の教師陣は東京帝国大学出身の史料編纂官が教壇に立つ例が多かったが、時代が下るにつれ國學院出身教師も増えていった。特に戦前においては、國學院出身者による歴史学教師は、八代国治、井野辺茂雄、植木直一郎、大場磐雄、高橋隆三、高柳光寿、山本信哉、岩橋小弥太が挙げられ、八代、井野辺、高橋、高柳、山本、岩橋は史料編纂掛（史料編纂所）勤務を経ている。教わった側が教える立場になり、実戦経験を経て母校に戻ってくる形が確立したと指摘できる。着任時期を確定できる例としては、植木直一郎は明治四十年、山本信哉・八代国治は明治四十四年、高柳光寿は大正十一年、井野辺茂雄は大正十三年、岩橋小弥太は昭和元年、大場磐雄は昭和十年、

髙橋隆三は昭和十三年より本学で講義を受け持った。植木のように明治期から受け持っている人物はいるが、増えてくるのは大正期頃からで、本学で学んだ人材が帰ってきて奉職するようになる。後述するように、戦後も史料編纂所出身の本学教師は多々輩出されるが、そのサイクルの基礎が形成されはじめる時期と見ることができる。すなわち、東大から出向いた教師達が本学の生徒を教育し、その生徒が史料編纂所に入り、さらに実戦経験を身につけた元生徒が今度は本学に教師として戻ってくる、という一連の流れが形成されていった。

しかしながら、戦争が激化してくると、この陣容も徐々に崩れていく。昭和十七年度は戦争激化により卒業期が半年繰り上げられ、学則改正の上、同年十月に新学期を迎えることとなった[30]。

十月開設学部講座・担当者は次の通りである。

〈史料四〉昭和十七年十月開設科目※史学部分抜粋[31]

共通基礎科目

史学概論　小林元

国史学科

大化改新　坂本　太郎　国史学演習　辻　善之助　東洋史演習　市村瓚次郎

武家政治　渡辺　世祐　国史学演習　高柳　光寿　西洋史学（概説）　小林　秀雄

建武中興　龍　粛　国史学演習　髙橋　隆三　西洋史学（近世）　内藤　智秀

尊皇攘夷　井野辺茂雄　東洋史学（概説）　石田幹之助　古文書学　岩橋小弥太

明治維新　渡辺幾治郎　東洋史学（近世）　志田不動麿　有職故実　河鰭　実英

日本法制史　植木直一郎　東洋史学（東亜民族史）和田　清　考古学　後藤　守一

※特別講座に田辺尚雄。

後藤守一、坂本太郎、渡辺幾治郎が新任であり、また、一覧には記されていないが、松本純郎（国史）を迎えた。[32]

しかしながら、昭和十七年十二月に休講措置が取られ、史学では藤懸静也、荻野仲三郎に休講を願っている。[33]更に昭和十八年三月に教壇を去る教師陣が複数おり、史学では長寿吉（西洋史）が退職している。[34]更に、昭和十九年三月付で退職した教授・講師陣にも、志田不動麿（東洋史）・森田鉄三郎（西洋史）・市村瓚次郎（東洋史）・井野辺茂雄（日本史）・内藤智秀（西洋史）・秋岡武次郎（歴史地理）ら長年教鞭を執ってきた教師陣が大学を離れている。[35]『國學院大學百年史』によると、昭和十九年継続教授・講師陣は、後藤守一（考古学）・高橋隆三（日本史）・高柳光寿（日本史）・大場磐雄（考古学）・田辺尚雄（音楽史）であった。[36]

## 三　戦後の授業

最後に、終戦を経て、戦後の授業再開から、学則の改正、さらに新制文学部の発足に至るまでの講座や教師陣について軽く触れておきたい。なお、組織の改正や設置までの経緯などについては『國學院大學百年史』に詳しいため、[37]ここでは割愛させていただく。

終戦後、戦場からの復学者や動員解除により大学に戻った学生に対し十月から授業が再開した。昭和十八年度の予科入学者の多数は一年次の成績が記載されるが、二年次は応召或いは勤労動員により成績欄が空白状態であり、同二十年四月学部進学したが、受講できた学生はごく少数だった。[38]昭和二十年度の講座及び担当者は、学部は坂本

太郎（日本史学）・奥野高広（奥野高広）・植木直一郎（法制史）・石田幹之助（東洋史学）・小林秀雄（西洋史学）である。また、史学概論も開講されたが、担当は記されていない。[39]

昭和二十一年度も学部・予科・専門部に分かれたが、同年三月三十一日～四月三十日付委嘱の史学教授・講師陣を抜粋すると、教授に小林秀雄（西洋史学）・石田幹之助（東洋史学）・樋口清之（考古学）・桑田忠親（日本史概説）・岩橋小弥太（日本史学）、講師に中川徳治（人文地理）・松本勝三（日本史各説）・坂本太郎（日本史）・奥野高広（日本史学）・村田正志（古文書学）・内藤智秀（西洋史学）・市古宙三（西洋史学）・大場磐雄（考古学）・河鰭実英（有職故実）・宮地治邦（東洋史）、という陣容であった。[40] 但し、昭和二十一年度に実際に開講された学部史学講座及び教師は、大場磐雄（考古学）、岩橋小弥太（史学概論・日本史学演習）、坂本太郎（日本史学）、奥野高広（日本史学）、小林秀雄（西洋史学）、村田正志（古文書学）のみであり、「以前の如く全講座を開講する余裕がなく、休講処置を執るも已むを得ぬ状況にあり」、休講を願う諸先生に対し、挨拶状を発し了解を願うという有様であった。[41] 結局、「植木直一郎・久松潜一・守随憲治・辻善之助・井野辺茂雄・龍粛・渡辺世祐・山岸徳平・増田栄・田辺尚雄・河鰭実英の諸先生の担当講座は休講」となったのである。[42] しかしながら、この時点で植木・辻・井野辺・龍・渡辺・田辺・河鰭ら戦前からの教師陣も引き続き委嘱予定だったことがわかる。

その後、同年九月に学則改正が行われ、[43] 昭和二十二年六月学部第二部が開設された。当時から二十七年度までの史学開講科目及び担当者を抜粋すると、次のようになる。

〈史料五〉昭和二十二―二十七年第二部史学講座担当者（抜粋）[44]

史学概論：二十二年度―二十六年度　石田幹之助／二十七年度　藤井貞文

日本史学：二十二年度―二十六年度　岩橋小弥太
日本史学：二十二年度―二十七年度　奥野高広
日本史学：二十三年度―二十七年度　桑田忠親
法　制　史：二十三年度、二十五―二十六年度　岩橋小弥太
東洋史学：二十二年度―二十七年度　市古宙三
東洋史学：二十三年度―二十四年度　宮地治邦
西洋史学：二十二年度―二十七年度　倉橋文雄
古文書学：二十二年度―二十七年度　村田正志
（不　明）：二十三年度―二十四年度　斎木一馬
考　古　学：二十三年度―二十六年度　樋口清之
人文地理学：二十五年度―二十六年度　中川徳治

なお、昭和二十二年には女子教養科も開設している。[45]

さらに昭和二十三年には、新制文学部が発足することとなった。教授に小林秀雄（西洋史）・樋口清之（史学概論・人類学・考古学）・桑田忠親（日本史概説）・岩橋小弥太（歴史地理・法制史）、兼任教授に石田幹之助（史学概論・支那学・東洋史学）、講師に市古宙三（東洋史概説）・奥野高広（日本中世史）・大場磐雄（考古学）・倉橋文雄（西洋史概説）・坂本太郎（日本上代史）・中川徳治（人文地理）・村田正志（古文書学）・宮地治邦（日本史概説）・斎木一馬（日本中世史）が委嘱され、[46]二十四年度に大場磐雄が教授委嘱、中川徳治が助教授に昇任している。[47]以降、

二十四年度に関野雄（東洋史演習）・藤井貞文（日本史演習、二十七年度に教授委嘱〈日本時代史〉）・和田久徳（東洋時代史）、二十六年度に森田幸之助（人文地理）・鈴木敬三（歴史）、二十八年度に西田直二郎（史学概論）・野間静六（美術史）、二十九年度に大野真弓（外国史学）、三十年度に丸茂武重（人文地理）・河鰭源治（東洋史）・稲生典太郎（東洋史）が講師として委嘱されている。一方で退職者もおり、二十四年度に講師斎木一馬が、三十一年度に講師宮地治邦が退職している[48]。

参考までに、昭和二十四年開講講座を概観しておきたい。同年度は旧制と新制が混在しているのも特徴である。

〈史料六〉昭和二十四年度開講講座[49]

| | | | |
|---|---|---|---|
| 史学概論（旧制） | 石田幹之助 | 西洋史概説（新制） | 倉橋文雄 |
| 日本史概説（新制） | 岩橋小弥太 | 西洋上代史（新制） | 小林秀雄 |
| 日本上代史（旧制） | 坂本太郎 | 西洋中世史（新制） | 増田四郎 |
| 日本上代史（新制） | 大場磐雄 | 西洋近世史（新旧共） | 倉橋文雄 |
| 日本中世史（新旧共） | 奥野高広 | 西洋史演習（新旧共） | 倉橋文雄 |
| 日本中世史（新制） | 斎木一馬 | 歴史地理学（新制） | 岩橋小弥太 |
| 日本近世史（新旧共） | 藤井貞文 | 日本法制史（旧制） | 岩橋小弥太 |
| 日本史演習（新制） | 桑田忠親 | 古文書学（新旧共） | 村田正志 |
| 東洋史概説（新制） | 市古宙三 | 考古学（旧制） | 樋口清之 |
| 東洋上代史（新制） | 関野雄 | 考古学（新制） | 大場磐雄 |

東洋中世史（新制）　和田久徳　志那学（新旧共）　石田幹之助
東洋近世史（新旧共）　市古宙三　日本仏教史（旧制）　花山信勝
東洋史演習（新旧共）　石田幹之助

戦前からの継続者として石田、岩橋、大場、小林、花山[50]が、戦後より加入の國學院出身者に斎木、藤井、桑田、村田、樋口、奥野の名が見える。また、史料編纂所出身者として奥野、斎木、桑田、村田、坂本が該当する他、藤井はかつて維新史編纂官を経験している。すなわち、国史分野はほぼ学内出身者かつ史料編纂所の出身者で構成されており、戦前に組み立てられたシステムが機能していたことが確認できる。人員の入れ替えが、終戦を契機に加速したことが窺える。なお、本学出身者は、国史学会に携わってきたメンバーでもあり、国史学会を支えてきた人員が教師となっていたようである。[51]

## おわりに

これまでの分析を踏まえ、本稿をまとめておきたい。まず、國學院開校当初の国史の授業は、種類は多くないが当時の第一線を張る研究者によって教鞭を執られ、教師陣の質の高さが、学生が入学を決める指針となった。講義内容は古事記や日本紀、徳川史の他、法制において令義解などが講じられるなど、後の時代で国史学科にて開講講座として見受けられる授業が既に設けられている。明治四十年の大学部開講時は、開校当初に比べ教師・講座の種類共に大幅に増加している。特にこの時点で時代史が充実している他、古文書や記録について個別に学べる講座が開講されていることは特筆すべき点である。また、大学令公布後、戦後頃まで大学の教壇に立つ教師陣の名が登場しており、

戦前の國學院大學の授業基盤がこの頃成立した。

大学令公布後、史学関連の講座・教師陣が更に充実していく。時代史や史料講読系の授業だけではなく、美術史・音楽史などの文化系授業や、仏教史、神祇史、倫理学史なども歴史系授業の一つとして扱われ、大学部設置以来、学びの充実が計られてきたことがわかる。また、鳥居龍蔵による考古学の授業も開始され、今日に至る國學院大學の考古学の出発点となった。また、国史分野は東京帝国大学の史料編纂官が教鞭を執っている。元々は東大出身者かつ史料編纂官の者を中心とした教師陣だったが、本学で彼らに教えを受けた者が史料編纂所で奉職し、元國學院生がそこで実戦経験を積んだ後、本学にて教鞭を執る、という形に徐々に移行していったことで、結果的に史料編纂所と國學院大學国史学科の間でこの教育サイクルの形が作られ始めている。この流れから、戦後において国史分野の学内出身者かつ史料編纂所出身者率が上昇しており、戦時中及び戦後の対応や休講措置によってこの動きが加速したことが指摘できた。

全体を通して、本学で開講されてきた授業の中でも、古文書学や記録、様々な講読の授業からは、既に大学部設置の段階で、史料の扱いを重要視し、実証史学を旨とする本学の史学の精神が生きていたことを窺わせる。昭和期に入ってからの豊富な講義分野も、学生の学びに資するものとして判断できよう。

以上のように、国史学科で開かれてきた講座や教師陣の特徴の大要を、視覚的に確認・分析することができた。このような歴史を辿り、現在の史学科に繋がっていくことになる。一方、本稿ではその系譜を概観することはできたが、史料調査が及ばなかったため、教師陣の個々の授業内容の詳細について分析することができなかったのが悔やまれる。また、昭和三十年以降の史学科についても触れられなかったので、この辺りについては今後の課題としたい。

## 註

(1) 拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」(『國學院大學　校史・学術資産研究』一三　令和三年)、同「岩橋小弥太と國學院大学―その教育と古文書学」(『國學院大学　校史・学術資産研究』一二　令和二年)

(2) 『國學院大學百年史　上・下』　学校法人國學院大學　平成六年。以下『百年史』と呼称。

(3) 稲村真里「國學院の最初の頃」(『國學院雑誌』四六―一二(五五六号)　昭和十五年)四〇頁

(4) 前掲稲村「國學院の最初の頃」四一―四二頁

(5) 田辺勝哉「井上頼圀先生の思ひ出」『國學院雑誌』四六―一二(五五六号)　昭和十五年)五五頁

(6) 高橋龍雄「思ひ出三章　佐々木老候御父子――内藤耻叟先生と湯本武比古先生――諸先生の講釋振り」(『國學院雑誌』四六―一二号(五五六号)　昭和十五年)六〇―六一頁

(7) 『百年史　上』四〇五―四〇六頁

(8) 『百年史　上』四〇六頁

(9) 「本学年各学科担当講師」(『國學院雑誌』一七―一〇(二〇四号)　明治四十四年)九四頁より作成。

(10) 「本学年各学科担当講師」前掲九四頁

(11) 「本学年各学科担当講師」前掲九五頁

(12) 『百年史　上』五六六頁、単位数は省略。

(13) 〈史料四〉、『國學院雑誌』二一―一一(二四一号)大正四年　一〇一頁、他。明治四十四年から大正四年まで『國學院雑誌』にて確認。

(14) 『國學院雑誌』一五―九(一七九号)明治四十二年　九八頁、他。大正三年まで『國學院雑誌』で禁秘抄の授業を確認。

(15) 『國學院雑誌』一五―九(一七九号)明治四十二年　九八頁、他。同四十四年まで『國學院雑誌』で台記・玉葉の授業を「講読」もしくは「古文書学」として確認。

(16) 『國學院雑誌』一九―九(二二七号)大正二年　九〇頁。「記録」とは別の授業として記載。

(17) 『國學院雑誌』一五―九(一七九号)明治四十二年　九八頁、他。

(18)『國學院雑誌』一五―九（一七九号）明治四十二年　九八頁、他。明治四十三年まで確認。
(19)『國學院雑誌』一七―一〇（二〇四号）明治四十四年　九四頁、他。
(20)『國學院雑誌』一五―九（一七九号）明治四十二年　九八頁、他。
(21)『國學院雑誌』一五―九（一七九号）明治四十二年　九八頁、他。大正四年まで確認できる。
(22)『國學院雑誌』一八―九（二一五号）大正元年　七九頁。
(23)『國學院雑誌』一九―九（二二七号）大正二年　九〇頁。大正四年まで確認できる。
(24)『國學院雑誌』三〇―五（三五七号）大正十三年　七三頁（坪井九馬三）、『國學院雑誌』三一―五（三六九号）大正十四年　一一〇頁（志賀重昂）、『國學院雑誌』三二―六（三八二号）大正十五年　一三六頁（今井登志喜）、他。
(25)『國學院雑誌』一八―九（二一五号）大正元年　七八頁、他。大正四年度まで確認。
(26)『國學院雑誌』一五―九（一七九号）明治四十二年　九七頁、他。倫理・哲学科として開講され、大正三年まで確認可能。
(27)『國學院雑誌』三〇―五（三五七号）大正十三年　七四頁。
(28)主に宮地直一と山本信哉が神祇史や神道史を担当しており、昭和六―九年、同十一年、同十三年、同十四年度の『国史学』には、国史学科開講科目一覧に神祇史や神道史の講座が掲載されている。（『国史学』七、一一、一五、一九、三五、三八号）
(29)昭和三年度にこの三名は「国史」或いは「国史演習」の授業を受け持っている（『國學院雑誌』三四―八（四〇八号）昭和八年　一一四頁）。
(30)『百年史　下』九一四、九一七頁
(31)『百年史　下』九二〇―九二一頁
(32)『百年史　下』九二二頁
(33)『百年史　下』九二二頁
(34)『百年史　下』九二二頁
(35)『百年史　下』九六九―九七〇頁（史学関係抜粋）
(36)『百年史　下』九七〇頁
(37)『百年史　下』第八篇・第九篇

(38)『百年史　下』九九二頁

(39)『百年史　下』九九二―九九三頁。なお、予科は一年の日本史を松本勝三、二年は桑田忠親が、東洋史は樋口清之が担当したほか、専門部も国史を桑田が、東洋史を樋口が担当している。

(40)『百年史　下』一〇一九―一〇二〇頁

(41)『百年史　下』一〇二二頁

(42)『百年史　下』一〇二三頁

(43)『百年史　下』一〇三四―一〇三七頁

(44)『百年史　下』一〇四六―一〇四八頁

(45)『百年史　下』一〇四八―一〇四九頁

(46)『百年史　下』一〇八六―一〇八九頁

(47)『百年史　下』一〇八七―一〇八八頁

(48)『百年史　下』一〇八七―一〇八九頁

(49)『国史学』五十二号　七〇頁

(50)花山信勝が担当する仏教史（日本仏教史）は戦前から度々『国史学』に掲載される授業であり、昭和九・十三・十四年度の開講講座一覧に記されている（『国史学』二三　昭和九年　九四頁、『国史学』三五　昭和十三年　六二頁、『国史学』三八　昭和十四年　六四頁）。

(51)戦前の国史学会において学生指導に携わった者としては、昭和十一年から「看聞御記」や「室町時代史籍解題」を講読・講義した奥野高広、同じく昭和十一年より「久我家文書」講読を担当した村田正志、学生に対し国史教育や演習、史籍解題等をテーマとして指導する第二部例会にて講師をした藤井貞文などがこれに該当する。詳細は前掲拙稿「戦前・戦後期における国史学会の活動と教育」一三八―一四〇頁。